はしがき

本論集は 21 世紀 COE 研究「プラトンとロシア」参加者による二つ目の刊行物となります。2006 年 9 月 17 日に、北海道大学スラブ研究センターにおいて行われた研究発表会における発表とディスカッションをもとに執筆された論文 3 本と、研究会発表なしに書かれた論文 2 本を収録しています。なお論文は助言者に読まれて助言がなされた上で、再執筆するという形が採られており、その際には今回は執筆者としては参加しなかった貝澤哉（早稲田大学文学学術院）、杉浦秀一（北海道大学言語文化部）、兎内勇津流（北海道大学スラブ研究センター）の三名が助言者として参加していることをここで断っておきます。

この報告集では、最初の報告集を踏まえて、二つの方向性を打ち出しています。一つは前回の論文集が 19 世紀後半以降に集中していたので、それ以前の時代も考察対象としようという点です。坂庭論文は 19 世紀前半におけるプラトン受容の中心とも言える愛智会を扱っています。愛智会がロシア文化史上重要な団体であることは異論がないと思われますが、『ロシアを知る辞典』にはまだ項目として採択されておらず、この論文はこうした隙間をも埋め得る役割を担うと期待しています。また愛智会の受容以外については、下里論文が見取り図を提供してくれるでしょう。

第二の方向とは、以前の報告集における研究をより深く掘り下げるという問題設定です。根村論文は、前回扱われたウラジーミル・ソロヴィヨフとセルゲイ・トゥルベツコーイのプラトンをめぐる微妙な関係を描いています。北見論文はヴャチェスラフ・イワーノフとニーチェの関係性にプラトンがどのように介在するのかを前回論じたのに続く形で、ロースキーとベルグソンの関係性にやはりプラトンが同じような形で介在していることを描いています。最後の大須賀論文は、前回に続いてローセフの『神話の弁証法』を扱っています。『神話の弁証法』は昨年翻訳が刊行されており、これで訳者自身による解説が完結したとも言えるでしょう。

当初は、果たしてこのようなテーマで報告集が刊行できるだろうかという不安もあったのですが、こうして第 2 集の編集が終わってみると、プラトンというテーマの大きさを改めて感じさせられました。まだ時代や分野において漏れている部分も多いのですが、忌憚のないご意見・ご批判をいただければ幸いです。

なおスラブ研究センターCOE支援室の細野弥恵氏、横川大輔氏、岡田由香利氏にはお世話になりました。お礼申し上げます。

編集担当者：根村　亮